

グローバルな正義を実現するための動機に関する序 論的考察：リベラル・ナショナリズム論を出発点と して

藤原, 拓広
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/6777120>

出版情報：政治研究. 70, pp.145-172, 2023-03-31. Institute for Political Science, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

グローバルな正義を実現するための動機に関する序論的考察

——リベラル・ナシヨナリズム論を出発点として——

藤原 拓 広

第一節 はじめに

第二節 グローバルな正義論とは何か——リベラル・ナシヨナリズムの立場を中心に——

第三節 なぜ動機を探究するのか——政治哲学における動機づけの問題——

第一項 メタ倫理学におけるヒューム主義——その系譜のリベラル・ナシヨナリズム——

第二項 政治秩序の哲学としての政治哲学

第四節 誰の動機づけが重要なのか——一般的な人間像の導出——

第一項 英雄による英雄のための政治哲学からの脱却

第二項 一般的な人々を想定した理論の構築の必要性

第五節 おわりに

第一節 はじめに

本稿の目的は、政治哲学、とりわけグローバルな正義論という学問領域においてなぜ、動機づけの問題が重要なのかを明確にしたうえで、その動機づけの問題を考える際には主として誰を念頭に置くべきなのかを論じることである。その際、私は、いわゆるリベラル・ナシヨナリズム論を出発点とする。

従来の政治哲学者の多くは、動機づけの問題、すなわち何らかの正義の原理が存在するとして、その正義にかなった状態を実現するために人々をいかにして動機づけるのかという問題をあまり重視してこなかった。そのことは、近年盛んに論じられているグローバルな正義論において顕著である。いわゆるコスモポリタニズムの論者はもちろん、国内的な社会正義に関しては動機づけの問題を重んじているリベラル・ナシヨナリズムの論者でさえ、グローバルな正義を実現するための動機については十分に注意を払っていない。^①グローバルな正義の実現のためには、豊かな国の人々はみずからに課せられた義務を積極的に果たしていく必要があるにもかかわらず、そうした人々はそのように行動するように十分動機づけられていないというズレが存在するのであり、^②グローバルな正義論に関心を抱く論者はこのズレを少しづつでも狭めていかなければならない。^③

そこで本稿では、政治哲学者は規範や原則を探究するだけでなく、動機づけの問題にも注意を向ける必要があると指摘する。しかもその動機づけの理論の構築は、政治哲学の副次的な問題ではなく、根本的な問題であることを示す。

動機づけの問題がなぜ重要なのかという点の次に考えなければならないのは、その動機づけの問題に取り組む際にはどのような人々を主として念頭に置くべきかという点である。この問いに答えるためには、まず主として念頭に置くべきではないのは誰かという問いを検討することが近道だと思われる。私がここでとくに念頭に置かなくてもよいと考えるのは、ごく少数の英雄的な人々である。そのうえで、本稿では、政治哲学者が動機づけの理論を構築するときに対象

とすべきなのは、現実世界の大部分を占める非英雄的な人々、すなわち一般的な人々だと論じたい。一般的な人々をグローバルな正義の実現のためにどのようにして動機づけるのかという問題に、いま政治哲学者は取り組まなければならないのである。

本稿の議論でとくに着目していただきたい点は、次の三点である。一つめは、ヨラム・ハズニー (Yoram Hazony) の政治哲学の類型化を動機づけの問題という視点から考察した点、二つめは、グローバル化による国民の分断という現代的課題についても動機づけの観点から論じた点、三つめは、これまで政治哲学においてあまり重視されてこなかった動機づけの問題がなぜ重要なのか、そして、その動機づけは主として誰を対象とすべきなのかを、リベラル・ナシヨナリズム論を援用しながらあらためて丁寧に整理した点、である。これら三点については、第五節でもう一度言及したい。

本稿は、以下のような道筋をたどる。まず第二節では、そもそもグローバルな正義論とはどのような学問領域なのかをごく簡単に確認する。その際には、私が依拠するリベラル・ナシヨナリズムを中心に概観する。次に第三節では、政治哲学において動機づけの問題がなぜ重要なのかという問題を考察する。具体的には、メタ倫理学におけるヒューム主義という立場の存在とそれとリベラル・ナシヨナリズムの思想との関連性を確認したうえで、ハズニーによる政治哲学の類型化を参照し、動機づけの問題の重要性を明らかにする。第四節では、政治哲学者が構築する動機づけの理論は誰を対象としたものでなければならぬのかという問いを検討する。デイヴィッド・ミラー (David Miller)、パティ・タマラ・レナード (Patti Tamara Lenard)、マイケル・ウォルツァー (Michael Walzer)、パトリック・J・デニン (Patrick J. Deneen) といった論者の議論を基に、英雄による英雄のための政治哲学からの脱却の必要性を主張し、一般的な人々の動機づけが求められていることを指摘する。最後に第五節では、全体の議論をまとめて、今後の展望を述べる。

第二節 グローバルな正義論とは何か——リベラル・ナショナリズムの立場を中心に——

本稿は、「グローバルな正義」(global justice)を主題とする論考である。ここでは、そのグローバルな正義(論)とはそもそもどのようなものなのかを簡単に説明しておきたい。⁽⁴⁾

政治哲学者のコック・チョル・タン(Kok-Chor Tan)によれば、グローバルな正義論は、以下のような幅広い問題を扱い得る学問領域だとされている。たとえば、世界的貧困、経済的不平等、ナショナリズム、人権、人道的介入、移民、グローバル・デモクラシーやグローバル・ガバナンス、気候変動、国家間の正義である。⁽⁵⁾ただし、伊藤恭彦が指摘しているように、グローバルな正義という概念は、世界的貧困や経済的不平等に関する正義、すなわち「グローバルな分配的(経済的)正義」(global distributive justice)のみを指す場合も少なくない。⁽⁶⁾本稿も、グローバルな正義という語を用いる際には、このグローバルな分配的正義を主として念頭に置くこととする。いい換えれば、単一の分配的正義の構想をグローバルに拡大することは可能なのか、それとも、そうした一つの構想はある一つのネイションにしか適用できないのか、という問題を前提に論じていくこととする。⁽⁷⁾

こうした問題をめぐっては、いわゆるコスモポリタニズムの理論家とナショナリズムの理論家とが激しい論争を繰り広げてきた。前者のコスモポリタンが単一の分配的正義の構想をグローバルに拡大することは可能だと考える傾向にあるのに対して、後者のナショナリストはそうした構想をグローバルに適用することは望ましくないと考える傾向がある。⁽⁸⁾ナショナリストがそう考える理由は、一つの社会正義の構想は一つのナショナルな共同体の内部でもっともよく実現されるという理由である。このように、リベラル・デモクラシーを実現する政治的単位としてネイションを擁護する立場は、「リベラル・ナショナリズム」(liberal nationalism)と呼ばれる。⁽⁹⁾

リベラル・ナショナリズム論の理論家が一つの分配の構想は一つのナショナルな共同体の枠内でもっともよく実現さ

れると考えるのは、彼らがナショナルな自己決定の価値やネイションという共同体の有する動機づけ力を高く評価しているからである。ここでは、そのうち本稿ととりわけ関連の深いネイションの動機づけ力についてのみ言及しておきたい。⁽¹⁰⁾

なぜリベラル・ナショナルリストは、ナショナルな共同体の内部では分配的正義を実現するための動機が得られやすいと考えるのか。その理由は、ナショナル・アイデンティティを共有する人々のあいだでは、共感や信頼感といった分配的正義の実現を下支えする感情が生じやすいことである。リベラル・ナショナルリズムの代表的論者の一人であるウィル・キムリック (Will Kymlicka) によれば、ネイション形成は人間の狭い共感能力をナショナルな共同体の範囲にまで広げることに成功したという。⁽¹¹⁾ キムリックによると、その拡大された共感能力によって、ナショナルな枠組みでの再分配政策は可能となっているというのである。次に、信頼感とは、「いま、貧しい人のために犠牲を払ったとしても、自分に自分が困窮したときに助けてもらえるという信頼感である」⁽¹²⁾。こうした信頼感は、社会正義の実現の重要な前提であるという。デイヴィッド・ミラーは、「社会正義の枠組み、とくに、市場での取引を通じて自活できない者に対する再分配を含む枠組みを各個人が支持する条件について考えるとき、信頼は特別な重要性を帯びるようになる」⁽¹³⁾としてい⁽¹⁴⁾る。このような理由から、リベラル・ナショナルリストは一つの分配的正義の構想は一つのナショナルな共同体の枠内で実現すべきだと考えているが、彼らは決してグローバルな正義そのものを認めていないわけではない。たとえばその代表的理論家であるミラーは、単一の分配の原理に基づくグローバルな正義には否定的なものの、人権、搾取の禁止、ナショナルな自決といった価値を基礎とするグローバルな正義は認めている。⁽¹⁵⁾

ここで私自身の立場を明確にしておけば、私は基本的にリベラル・ナショナルリズムの立場をとる。ただし、既存のリベラル・ナショナルリズム論にまったく問題がないと考えているわけではない。たとえば、施光恒や白川俊介も指摘しているように、ミラーがグローバルな正義についてもその実現の必要性を(積極的に)認めているにもかかわらず、その

実現のための動機づけの議論を十分におこなえていないことは大いに問題である。⁽¹⁶⁾したがって、グローバルな正義を実現するための動機づけに取り組んでいくことが必要であり、そのまえにあらためてリベラル・ナショナリズム論を手がかりとしながら、政治哲学さらにはグローバルな正義論においてなぜ動機づけの問題が重要なのかを明らかにしておきたい。

第三節 なぜ動機を探究するのか——政治哲学における動機づけの問題——

ここまで、グローバルな正義論をごく簡単に概観したが、その一つの立場であるリベラル・ナショナリズム論では、動機づけが鍵となることが分かった。だが、政治哲学やグローバルな正義論におけるそのほかの立場では、動機づけの問題があまり重視されないことも少なくない。たとえば、現代政治哲学における代表的なコスモポリタンであるサイモン・ケイニー (Simon Caney) やトマス・ポッグ (Thomas Pogge) は、義務といった抽象的原理それ自体に動機づけ力があると考えており、その義務がどのようなものかを特定する以外にわざわざ動機づけについて別の議論を展開する必要はあるとは考えていない。⁽¹⁷⁾リベラル・ナショナリストであるデイヴィッド・ミラーも、グローバルな正義に関して同様の傾向を有している。⁽¹⁸⁾

本節では、政治哲学ではあまり重視されてこなかった動機づけの問題が、なぜ実は重要なのかを明らかにしていきたい。

第一項 メタ倫理学におけるヒューム主義——その系譜のリベラル・ナショナリズム——

人々を何らかの行動に至らせるためには、その行動の道徳的価値を信じさせさえすれば十分なのか、それとも、それ

以外の欲求が必要なのか、という問いは、メタ倫理学（道徳心理学）という分野で活発に議論されている。¹⁹メタ倫理学において、人々の動機づけには道徳的信念だけでなく欲求が必要だとする立場は「ヒューム主義」と呼ばれ、欲求は必要なく信念のみで十分だとする立場は「反ヒューム主義」と呼ばれる。

まず、ヒューム主義であるが、この立場は「信念」(belief)と「欲求」(desire)とを分離する立場である。ここでいう「信念とは何らかの事実について私が信じていることであり、欲求とは何かをしたいとかこうあってほしいと欲すること」²⁰を意味する。ヒューム主義者はそのうえで、人々が動機づけられるには、前者の信念だけでなく後者の欲求も必要だと考える。いい方を換えれば、人間は、何らかの事実について「○○だ」と信じるだけでなく、「○○したい」と思わなければ決して動機づけられないというのである。対して、反ヒューム主義は、人間の行動は信念のみで十分に動機づけられるのであり、そのために欲求は必要ないという立場である。なお、ヒューム主義に対する反対論のなかには、そもそも信念と欲求との分離自体が不可能だという主張もあるが、倫理学者の佐藤岳詩によると、その主張の方は比較的簡単に退けられてしまうという。²¹

私がここで行いたいのは、ヒューム主義と反ヒューム主義とのどちらが正しいのかを検討することではない。私がこの論争を紹介した理由は、信念のみで人々は動機づけられるのか、それとも、信念とは別の欲求を必要とするのかという論争があり、欲求が必要だとする立場も一定の支持を得ているということとを述べたからにすぎない。²²このことに鑑みれば、政治哲学者はある行動の道徳的価値だけでなく、その行動がいかなる欲求によって動機づけられるのかについても注意を払うべきだという主張は、突飛なものではない。

実際、現代政治哲学において一定の地位を得ているリベラル・ナシヨナリズムの思想も、このヒューム主義の系譜を汲んでいる。²³たとえばミラーは、以下のように述べている。

個別主義者が提起する倫理観は、カント的というよりもヒューム的であるといえる。ヒュームの考えでは、道徳性は自然感情との関係において理解されるべきであり、したがって私たちが他者に関してくださ判断は、親類や仲間に対する彼らの（そして私たちの）自然な好感情を反映しているに違いないのである。⁽²⁴⁾

ミラーはヒューム主義的に、道徳的判断は自然感情、たとえば「親類や仲間に対する〔…〕自然な好感情を反映している」と考える。先述のように、ミラーが分配的正義を実現する場としてネイションを重視するのは、このためである。ミラーによれば、ナショナル・アイデンティティには人々を統合する力があるゆえに、あらゆる分配の原理は境界づけられた共同体、とりわけナショナルな共同体で適用可能とされてきたのである。彼は、このことは「心理学的事実」と述べている。⁽²⁵⁾

リベラル・ナシヨナリズムの論者の一人として数えてもよいであろうバーナード・ヤック (Bernard Yack) も、直接ヒュームに言及しているわけではないが、心理学や進化生物学といった経験的な社会科学の知見を援用しながら、動機づけに関するヒューム主義的見解を支持している。彼によれば、社会を結びつける動機には、正義という原理だけでなく、自己利益や社会的友情 (social friendship) も含まれるといっているのである。⁽²⁶⁾

このように、リベラル・ナシヨナリズムの思想は、ヒューム主義の流れを汲んでいるといえるであろう。⁽²⁷⁾

第二項 政治秩序の哲学としての政治哲学

以上、リベラル・ナシヨナリズムの議論が、人々の動機づけには欲求が必要であるとするヒューム主義の流れを汲んでおり、それゆえにナシヨナルな文脈では動機づけの問題が強調されていることを示した。

ただし、それでもなお、次のような疑問を抱く人は少なくないかもしれない。すなわち、もし人々を十分に動機づけ

るためには欲求が不可欠であり、そのことを認めている政治哲学者が多くいるとしても、やはり政治哲学者のすべきとは規範の探究であつて、動機づけの理論の構築ではないだろう。政治哲学者は、たとえばリベラル・デモクラシーの理念や原理の妥当性などのような事柄についてのみ議論をおこなうべきではないか、という疑問である。⁽²⁸⁾ 本項では、こうした疑問に対して、イスラエルの政治哲学者であるヨラム・ハズニーの政治哲学の類型化を通じて答えていく。⁽²⁹⁾

ハズニーは、政治哲学を、「政府の哲学」(philosophy of government)と「政治秩序の哲学」(philosophy of political order)とに分けている。⁽³⁰⁾ ハズニーのいう政府の哲学とは「内部のまとまりと独立性が高い国家の存在を前提として、最善の政府形態を決定しようとする」⁽³¹⁾ものを指し、政治秩序の哲学とは「政治秩序の原因を理解し、その理解に基づいて、私たちが利用できる政治秩序のさまざまな形態を見つけたし、そのなかでそれが最適か判断しようとするもの」⁽³²⁾を指す。ハズニーによると、これら二つの政治哲学はどちらも有用だが、前者の政府の哲学は国家の存在を自明視してしまふ点に問題があるという。政府の哲学では、たとえば政府の形態としてリベラル・デモクラシーは最善かといったことは論じられるが、そもそもその前提である結束し独立した国家をどのように維持していくかには注意が払われない。そこで重要となるのが、後者の政治秩序の哲学である。いい換えれば、政府の哲学が「有効性を発揮するためには、国家の形成、結束、独立、および国家の破壊の根本的な原因の理解に基づいて、その哲学が構築されなければならない」⁽³³⁾というのである。ここで重要なのは、ハズニーにとっては、政治秩序の哲学の方がより根本的で重要だとさえされていることである。

ハズニーの類型化を見れば、前述の疑問が前提として政治哲学の理解が一面的なものだということが分かるだろう。当然ながら、いかなる政府の形態が最善かという問いも重要ではあるが、そもその政治秩序が成立する理由についても真剣に考察がなされなければならないのである。

私の見解では、動機づけの問題は、政治秩序の原因に関するものであるため、政治秩序の哲学に該当する。評論家の

中野剛志は、『政治秩序の哲学』が問うのは、『人間はどうあるべきか』という『理想』ではなく、人間はどういうものかという『現実』だ³⁴と述べているが、動機づけの問題が問うのは、『現実』である。前述したように、動機づけの問題の背景には、豊かな国の人々はグローバルな正義の義務を果たしていく必要があるにもかかわらず、そうした人々はそうするように十分に動機づけられていないというズレが存在している。動機づけの問題とは、そのような人々が『人間はどうあるべきか』という『理想』に近い行動をとれるように、そもそも『人間はどういうものか』という『現実』を問うものかといつてよいかもしれない。だとすれば、動機づけの問題は、政治哲学で扱うべきではない問題どころか、その根本的な問題の一つなのである。³⁵

第四節 誰の動機づけが重要なのか——一般的な人間像の導出——

政治哲学者は動機づけの理論を構築する必要があるとして、その理論は誰を対象としなければならないのだろうか。換言すれば、政治哲学者が動機づけの問題を考える際には、どのような人々を主として念頭に置くべきなのであろうか。本節では、政治哲学者による動機づけの議論は、誰の動機づけを問題としなければならないのかを考察する。

第一項 英雄による英雄のための政治哲学からの脱却

動機づけの問題について考える際に主として念頭に置くべきなのは誰かを検討するまえに、誰を念頭に置かなくともよいのかを明らかにしておきたい。私がここでとくに念頭に置かなくともよいと考えるのは、ごく少数の英雄的な人々である。

デイヴィッド・ミラーが、その理由を明確にしてくれている。ミラーは、次のように述べている。すなわち、「ひたす

ら原則に配慮して生活を律することが実際に可能なのは、おそらくごく少数の英雄的個人だけであって、そうでなければ、理性的確信がそこまで重要な役割を果たすことなどあり得ないように思われる⁽³⁶⁾。つまり、一部の英雄的な人々は、原則や理性的確信によって十分に動機づけられ得るといのである。もしそうであれば、彼らをわざわざ動機づけの議論の主たる対象とする必要はないであろう。

同様の指摘は、リベラル・ナシヨナリズム論に親和的な政治哲学者であるパティ・タマラ・レナードによってもなされている。レナードは、以下のように論じている。

高い教育を受けた一部のエリートは（調査研究がときおり示すように）、自分たちは国境を越えた義務（とても厳しい義務）を負っているのだと信じているかもしれない。しかしながら、実際問題として、私たちのうちの大多数は日常生活において、友人や家族、隣人、同国人などのニーズを優先するものである。⁽³⁷⁾

ここでのエリートという表現はミラーのいう英雄的個人という表現とほぼ同じ意味だと思われるが、レナードも、そうした人々はみずからに厳しい義務が課せられていると信じている可能性が高いので、わざわざ彼らを動機づけの理論の対象としなくてもよいと示唆しているのである。

ミラーやレナードの議論が示しているように、英雄的な人々は、義務のような抽象的原理によって十分に動機づけられ得る。こうした人間像は、前述のケイニーやポツゲといったコスモポリタンが想定している人間像と通底するものである。ここで重要なことは、そのような人間はごく少数しか存在しないということである。だとすれば、やはり彼らを動機づけの理論の主たる対象とすべきではないであろう。なぜなら、現実世界の大多数は非英雄的な人々であり、健全な民主主義国であればそうした大多数の人々の方が選挙権を通じて政治的意思決定において力をもち得るからである。

なぜ非民主主義国も多いなかで、わざわざ民主主義国の例をだすのかと思われるかもしれないが、それは、実際にグローバルな正義の実現のために大きな負担を強いられるのは民主主義国が多いからである。⁽³⁸⁾ それゆえ、動機づけの問題は、民主主義国、そして、そのなかの大多数の人々を想定して論じられるべきである。⁽³⁹⁾

「英雄的な」という形容詞に関連して加えて述べておきたいのだが、私がここで必要だと考えているのは「英雄的な」政治哲学者ではない。英雄的な哲学者という表現は、リベラル・ナシヨナリズムの論者の一人として数えられることもあるマイケル・ウォルツァーのものである。⁽⁴⁰⁾ この種の哲学者は、次のような者である。⁽⁴¹⁾ つまり、「何らかの特定の共同体で幅をきかせている政治的見解」「のすべてを括弧にいれ、理性的推論のみを用いて、真であり、それゆえ普遍的に妥当する政治の諸原則を確立しようとする」⁽⁴²⁾ ような哲学者である。

英雄的な哲学者が導きだす諸原則は、多くの人々に受け入れられるものではないという。「哲学者は自分の発見した諸原則を手にも政治共同体に戻ってくるのだが、——それらの原則が政治に関するそのほかの伝統や思考様式に結びついたものではないがゆえに——市民はその諸原則を受け入れたがらない」⁽⁴³⁾ というのである。

政治哲学者のバトリック・J・デニンによる『リベラリズムはなぜ失敗したのか』(Why Liberalism Failed) は、英雄的な学者が構築し、一部の英雄的な市民しか享受できないような政治哲学の問題点を象徴的に描いている。⁽⁴⁴⁾ デニンによれば、「リベラリズムは失敗した。リベラリズムを実現できなかったからではなく、リベラリズムに忠実だったからである。成功したために失敗した」⁽⁴⁵⁾。これは、どういうことだろうか。デニンによると、リベラリズムは、特定の文化や伝統の影響を受けておらず、みずからの(物質的・経済的)欲求を合理的に追求する自由な個人という誤った人間観を理論的前提としている。リベラリズムは、その誤った前提に基づいて、グローバルな自由市場の拡大をうながし、その過程での合理化や画一化の障壁となるような場所、文化、伝統、慣習、人間関係といった制約から人々を解放してしまつた。しかしながら、これらの文化や伝統は、たんなる制約ではなく、人々を結びつける絆でもあつた。その結果、

グローバルな市場が拡大していく一方で、さまざまな制約を失った人々はバラバラになり、そのバラバラになった個人をまとめるために、国家権力はさらに強化されたのである。つまり、リベリズムの行きすぎた個人主義によって人々が断片化されたことで、国家権力が強化され、結果的にリベリズムの理念は失敗におわってしまったというのである。⁽⁴⁶⁾

グローバル化による国民の分断という問題の存在を指摘しているのは、デニンだけではない。たとえばジャーナリストのデイヴィッド・グッドハート (David Goodhart) はこの分断を、どこでも生活できる「エニウエア族」とどこか特定の土地に住む「サムウエア族」とのあいだの分断ととらえており、政治学者のマイケル・リンド (Michael Lind) は、管理者 (経営者) エリートからなる「上流階級」と「労働者階級」との分断だと見なしている。⁽⁴⁷⁾ こうした分断も、やはり社会設計の際に前提とすべき人間観の誤りに端を発している。本来であれば、多数のサムウエア族や労働者階級を前提とすべきところを、グローバル化が進む現在の世界では少数のエニウエア族や上流階級が前提とされてしまっているのである。

デニンらの議論からも分かるように、誤った人間観に基づき理論や制度を構築しようとする、そのプロジェクトはうまくいかないことが多い。それゆえに、大多数の人々がどのような人々かを考え、その人々が無理なく受け入れられるような理論を構築することが不可欠である。⁽⁴⁸⁾

第二項 一般的な人々を想定した理論の構築の必要性

これまで、動機づけの理論はごく少数の英雄的な人々を主たる対象とするべきではないということを確認してきた。では、その理論は、どのような主体を主たる対象とすべきなのだろうか。前項までに述べてきたことから分かるように、現実世界の大多数を占める非英雄的な人々、すなわち一般的な人々である。⁽⁴⁹⁾

動機づけの問題を考える際に主として念頭に置くべきなのが一般的な人々だとすれば、次に考えなければならないの

は、その一般的な人々とはどのような人々かということである。ここで想定したい一般的な人間像とは、第一に、欲求によって動機づけられる人々であり、第二に、特定の場所、文化、伝統、慣習、人間関係のなかに生まれ落ち、それらによってアイデンティティの一部を構成する人々である。この二点は、動機づけの理論を構築するとき、とりわけ考慮すべき点である。

第一に、一般的な人々とは、欲求によって動機づけられた人々である。これは前節での議論をふまえた人間像であり、ふつうの人々は原理や信念だけでなく欲求によって強く動機づけられるだろうということである。ミラーが指摘するように、

人類の大部分にとって、倫理的な生活とは一つの社会的枠組みにほかならない。その枠組みの諸原則は、身内や同僚などに対する自然な感情を斟酌しなければならず、また人々をさまざまな要求にしたがわせるだけの複雑に絡みあった動機——純粹に理性的な確信だけでなく、愛情、自尊心、羞恥といった動機——に基づいていなければならないのである。⁽⁵⁰⁾

ここでの「複雑に絡みあった動機」が具体的にはいかなるものかということについては本稿では検討しないが、それはおそらくヤツクのいう自己利益や社会的友情に近いものとなると思われる。なお、私は、グローバルな正義に関しては、それを実現するための動機は「自己利益を追求したい」という欲求が中心になるのではないかと考えている。

第二に、一般的な人々とは、特定の場所や文化、伝統、慣習、人間関係のなかに生まれ落ち、それらによってアイデンティティの一部を構成するような人々でもある。これは、前項の議論から導きだされる人間像である。デニーン⁽⁵¹⁾の議論に鑑みれば、「現実の人間は、特定の『時間と場所』、つまり特定の文化や伝統にある程度拘束されると同時に、

それに生かされている存在⁽⁵¹⁾である。一般的な人々のこの特徴につけ加えれば、そうした人々は、レナードがいう「感情の範囲」(emotional range)の問題を有していることも重要である。⁽⁵²⁾これはすなわち、ふつうの人々は、遠く離れた他者(たとえば外国人)よりも近い他者(たとえば同国人)に対して強い共感の念を抱くことである。動機づけの理論の構築の際には、この点も当然考慮しなければならないと思われる。

ここで留意しておきたいのは、一般的な人々が特定の文化や伝統などのなかに生まれ落ち、それらをアイデンティティの構成要素の一部とする人々であるとしても、文化横断的に妥当する動機づけの理論は構築できるということである。なぜなら、私がここで実現に向けて動機づけたいと考えているグローバルな正義は、社会正義のような厚い道徳ではなく、基本的人権の保障のような最低限の薄い道徳だからである。⁽⁵³⁾もし実現したいのが厚い道徳であれば、動機づけの方法は文化ごとに異なるが、薄い道徳であれば、そうした文化差はあまり生じないと思われる。⁽⁵⁴⁾

この点をふまえれば、グローバルな正義を実現するための動機について考える際には、「分配的正義のような厚い道徳を実現する動機は、ナショナルな文化やアイデンティティに求め、薄い道徳をグローバルな次元で実現するための動機、および他のネイションの自決を尊重し必要であれば援助するための動機について、真正面から取り組むべき」⁽⁵⁵⁾だといえる。なお、上述したように、私は文化横断的に妥当する動機づけの理論を構築するうえで鍵となるのは自己利益という概念だと考えており、今後はこの自己利益に基づく動機づけの理論を構築していきたいと考えているが、それは別稿にゆずりたい。

第五節 おわりに

本稿では、政治哲学という分野においてなぜ動機づけの問題が重要なのかを明らかにしたうえで、その動機づけの問

題を検討する際には主として誰を対象とすべきなのかを考察してきた。

まず、政治哲学で動機づけの問題がなぜ重要なのかについては、以下のような議論をおこなった。人々を動機づけるには欲求が必要なのかという問いは、メタ倫理学の分野で活発に議論されている。その論争のなかには、欲求は必要ないとする立場（反ヒューム主義）もあるが、欲求は不可欠だと考える立場（ヒューム主義）も存在し、一定の支持を得ている。また、リベラル・ナシヨナリズムの思想も後者のヒューム主義の系譜を汲んでいることに鑑みれば、政治哲学者は動機づけの問題を重視しなければならないという主張は決して突飛なものではない。

それでもなお、政治哲学者のすべきことは規範の探究であって、動機づけの理論の構築ではないのであり、政治哲学者はたとえリベラル・デモクラシーの理念や原理の妥当性などについてのみ議論をおこなうべきではないか、という疑問が投げかけられるかもしれない。このような疑問には、ヨラム・ハズニーによる政治哲学の類型化によって応答することが可能である。ハズニーは、政治哲学を、政府の哲学と政治秩序の哲学とに区分したが、私見では、動機づけの問題は政治秩序の哲学に該当する。ハズニーによれば、この政治秩序の哲学は政府の哲学よりも根本的な探究だとされており、もしそうであれば、動機づけの問題は政治哲学の根本的な問題の一つである。

次に、動機づけの問題について考える際には主として誰を念頭に置くべきかという問題に関しては、以下のような議論を展開した。どのような人々を念頭に置くべきかを検討するためには、まずどのような人々を主として念頭に置かなくてもよいのかを明らかにすることが必要であるが、私はそのような人々とは、ごく少数の英雄的な人々だと述べた。彼らは、すでに世界の貧困層に対する厳しい義務の存在を自覚している可能性が高く、また現実世界ではごく少数の存在であるため、わざわざ動機づけの理論の主たる対象としなくてよいのである。また、「何らかの特定の共同体で幅をきかせている政治的見解」「のすべてを括弧にいれ、理性的推論のみを用いて、真であり、それゆえ普遍的に妥当する政治の諸原則を確立しようとする」ような英雄的な政治哲学の問題も指摘した。パトリック・J・デニーン（Patrick J. Denning）の議論にしたが

えば、人々を特定の場所、文化、伝統、慣習、人間関係から解放しようとした行きすぎたりベラリズムは、英雄による英雄のための政治哲学の一つと違ってよいであろう。

以上のような議論をふまえて、私は、動機づけの理論を構築するときに対象とすべきなのは、大多数の一般的な人々であると論じた。また、その一般的な人々とは、第一に、欲求によって動機づけられる人々であり、第二に、特定の場所、文化、伝統、慣習、人間関係のなかに生まれ落ち、それらによってアイデンティティの一部を構成する人々であるとも論じた。

本稿の意義は、主として以下の三点である。第一に、ハズニーによる政治哲学の類型化を動機づけの問題の視点から考察したことである。ハズニーの類型化のうち、私がとりわけ着目したのは、政治秩序の哲学である。政治秩序の哲学とは、「政治秩序の原因を理解し、その理解に基づいて、私たちが利用できる政治秩序のさまざまな形態を見つけだし、そのなかでどれが最適か判断しようとするもの」であるが、私はその種の哲学には動機づけの問題が含まれるのではないかと述べたのである。

第二に、リベリズムやグローバリズムの人間観の誤りによる国民の分断という現代的課題についても動機づけの観点から論じたことである。リベリズムやグローバリズムが引き起こした国民の分断の背景には、そこで理論的前提とされている人間観の誤りがある。それらの思想は、エリートや英雄的個人を前提としているのである。こうした誤りは、本稿のように動機づけの問題を真剣に受け止めた際にも明らかにされるものである。グローバルな正義を実現するためには、動機づけの理論の主たる対象を、そうしたエリートや英雄的な人々ではなく、大多数の一般的な人々としなければならぬのである。

第三に、これまで十分に重要視されてこなかった動機づけの問題が政治哲学においてなぜ重要なのか、そして、その動機づけは主として誰を対象とすべきなのかを、リベラル・ナショナリズム論を参照しつつあらためて丁寧に整理した

ことである。既述のように、とくにグローバルな正義に関しては、動機づけの問題が重視されることはあまりなかった。そのような問題について、国内的な社会正義論については十分に動機の問題を考慮しているリベラル・ナシヨナリズム論を出発点としてあらためて丁寧な整理したことは、大いに意義があると思われる。本稿の読者によって、動機づけの問題に関する活発な議論が展開されれば幸いである。

本稿の結論は、「動機づけの問題を考える際に主として念頭に置かなければならないのは、欲求によって動機づけられ、特定の文化や伝統などのなかに生まれ落ち、それらをアイデンティティの構成要素の一部とするような一般的な人々だ」というものである。こうした人々を主たる対象としつつ、グローバルな正義の実現の基盤となり得る文化横断的に妥当するような動機づけの理論の構築が求められている。次の課題は、そのような一般的な人々は、どのようにして強力に動機づけられ得るのかを検討することである。

【付記】

※外国語文献で邦訳書を参照しているものについては、訳語や文体の統一などのために訳文を変更している場合がある。

※本稿は、二〇二二年七月一六日の九州大学政治研究会二〇二二年度七月例会で報告した「グローバルな正義を実現するための動機に関する序論的考察―リベラル・ナシヨナリズム論を出発点として―」に加筆修正を施したものである。当日ご参加いただいた方々は、感謝の意を申しあげたい。

※本稿の執筆に際しては、とりわけ施光恒教授（九州大学大学院比較社会文化研究院）のご指導を賜った。記して感謝したい。

注

(一)「グローバルな正義に関するオックスフォード・ハンドブック」(*The Oxford Handbook of Global Justice*)で動機づけの問題が一つの章で扱われるなど、近年動機づけの問題は少しずつ注目を集めてきている。See Gould, C. C., "Motivating Solidarity with Distant Others: Empathic Politics, Responsibility, and the Problem of Global Justice," in Brooks, T. (ed.), *The Oxford Handbook of*

Global Justice, Oxford: Oxford University Press, 2020. 日本国内においても、グローバルな正義をテーマとする論文集で、動機づけの問題の重要性を指摘するコメントが提出されている。施光恒「関係主義／非関係主義概念による整序」宇佐美誠編『グローバルな正義（勁草書房、二〇一四年）』一〇三—一〇四頁を参照。グローバルな正義論において、このように動機づけの問題などを重視する立場は「第三波」と呼ばれる。See Wolner, G., "The Third Wave of Theorizing Global Justice: A Review Essay," *Global Justice: Theory Practice Rhetoric*, Vol. 6, 2013, pp. 28-29. しかしながら、グローバルな正義論においては動機づけの問題にあまり関心を払わない論者がいまだに趨勢を占めており、あらためてリベラル・ナショナリズム論の理論家の議論を参照しながら動機づけの問題の重要性を丁寧に説明することは有意義だと思われる。

(2) デイヴィッド・ミラーはこうしたズレを、「正義をめぐるズレ」(justice gap)と呼んでいる。See e. g. Miller, D., *National Responsibility and Global Justice*, Oxford: Oxford University Press, 2007, Ch. 10 (富沢克・伊藤恭彦・長谷川一年・施光恒・竹島博之訳「国際正義とは何か——グローバル化とネーションとしての責任」(風行社、二〇一一年) 第10章); Miller, D., "Social Justice versus Global Justice?" in *his Justice for Earthlings: Essays in Political Philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013. 政治哲学者のパティ・タメラ・レナードは「同じようなズレを」「動機づけをめぐるズレ」(motivational gap)と呼んでいる。See e. g. Lenard, P. T., "Special Relationships, Motivation and the Pursuit of Global Egalitarianism," *Les ateliers de l'éthique*, Vol. 8, No. 2, 2013, p. 75.

(3) 藤原拓広「リベラル・ナショナリズムに基づくグローバルな正義論の問題点——デイヴィッド・ミラーの「正義をめぐるズレ」論の批判的検討」(第二四回政治と理論研究会口頭発表原稿、二〇二二年、未刊行)、一〇頁を参照。

(4) グローバルな正義論は、日本でも近年活発に論じられるようになってきている。したがって、その一連の詳細な議論については、たとえば押村高『国際政治思想 生存・秩序・正義』(勁草書房、二〇一〇年)・井上達夫『世界正義論』(筑摩書房、二〇二二年)を参照されたい。

(5) See Tan, K. C., *What Is This Thing Called Global Justice?* London: Routledge, 2017.

(6) 伊藤恭彦「グローバル・ジャスティス——公正な地球社会をめぐる規範」川崎修編『岩波講座 政治哲学 6 政治哲学と現代』(岩波書店、二〇一四年)、二二四—二二五頁を参照。

(7) こうした説明としては、同右、二二二—二二五頁を参照のこと。

(8) 単一の分配的正義の構想をグローバルに拡大することは可能なのか、それとも、一つの構想は一つのナショナルな共同体にしか適用できないものなのか、という論争は、もともと著名なコスモポリタンの一人であるチャールズ・ベイツ(Charles R. Beitz)の議論

に端を発している。ヘイツは『国際秩序と正義』(Political Theory and International Relations)において「格差原理」のようなゼン・ロールズ(John Rawls)的な分配的正義の原理をグローバルに適用するべきだと主張した。See Beltz, C. R., *Political Theory and International Relations*, Princeton: Princeton University Press, 1979 [進藤榮一訳『国際秩序と正義』(岩波書店、一九八九年)]。彼は、格差原理という単一の原理に基づくグローバルな平等を実現すべきだと考えていたのである。だが、そのような議論に対しては、たとえばリベラル・ナシヨナリズム論の代表的理論家たるミラーらによって、多くの異論が呈されている。See e.g. Miller, D., *On Nationality*, Oxford: Clarendon Press, 1995, pp. 107-108 [富沢克・長谷川一年・施光恒・竹島博之訳『ナシヨナリティにめぐむ』(風行社、二〇〇七年)、一八二―一八三頁]。

なお、このコスモポリタニズム対ナシヨナリズムという論争については、たとえば藤原拓広「グローバルな正義論における秩序構想と動機の問題をめぐって——コック・チャール・タンの議論の批判的検討を手がかりに——」『法学政治学論究』第一二九号、二〇一一年、一〇一―一〇五頁ですでにくわしく概観されているため、本稿ではコスモポリタニズムはとくに扱わず、リベラル・ナシヨナリズムのみを説明することとした。

- (9) この立場をとる論者の社会正義論としては、たとえば以下を参照のこと。Tami, Y., *Liberal Nationalism*, Paperback Edition with a new preface, Princeton: Princeton University Press, 1993, pp. 117-121 [押村高・高橋愛子・森分大輔・森達也訳『リベラルなナシヨナリズムとは』(夏目書房、二〇〇六年)、二五九―二六五頁]; Miller, *On Nationality*, Ch. 4 [邦訳: 第四章]; Canovan, M., *Nationhood and Political Theory*, Cheltenham: Edward Elgar, 1996, Ch. 4; Miller, D., *Principles of Social Justice*, Cambridge: Harvard University Press, 1999; Kymlicka, W. and Straehle, C., "Cosmopolitanism, Nation-States, and Minority Nationalism," in Kymlicka, W., *Politics in the Vernacular: Nationalism, Multiculturalism, and Citizenship*, Oxford: Oxford University Press, 2001, pp. 225-226 [「コスモポリタニズム、国民国家、マイノリティ・ナシヨナリズム」岡崎晴輝・施光恒・竹島博之監訳『土着語の政治ナシヨナリズム・多文化主義・シテイズンシップ』(法政大学出版局、二〇一二年)、三二六―三一八頁]; Moore, M., "Normative Justifications for Liberal Nationalism: Justice, Democracy, and National Identity," *Nations and Nationalism*, Vol. 7, No. 1, 2001, pp. 3-6; 施光恒『リベラル・ナシヨナリズム論の意義と展望——多様なリベラル・デモクラシーの花開く世界を目指して』萩原能久編『ポスト・ウォー・シテイズンシップの構想力』(慶應義塾大学出版会、二〇〇五年)、一五四―一五五頁; 白川俊介『ナシヨナリズムの力 多文化共生世界の構想』(勁草書房、二〇一二年)、第四章。

- (10) リベラル・ナシヨナリストの主張するナシヨナルな自決の重要性およびネイションのもつ動機づけ力については、たとえば藤原「リベラル・ナシヨナリズムに基づくグローバルな正義論の問題点」、三―四頁を参照されたい。

- (11) See Kymlicka, W., *Contemporary Political Philosophy: An Introduction*, Second Edition, New York: Oxford University Press, 2002, pp. 269-270 (千葉真・岡崎晴輝訳者代表『新版 現代政治理論』(日本経済評論社、二〇〇五年) 三九二―三九三頁)。
- (12) Kymlicka and Straehle, "Cosmopolitanism, Nation-States, and Minority Nationalism," p. 225 (邦訳: 三二七頁)。
- (13) Miller, *On Nationality*, p. 93 (邦訳: 一六三頁)。
- (14) レナード・ミラーがナショナル・アイデンティティと信頼との関係について検討した文献として、Lenard, P. T. and Miller, D., "Trust and National Identity," in Uslaner, E. M. (ed.), *The Oxford Handbook of Social and Political Trust*, New York: Oxford University Press, 2018を参照(以下)。
- なお、レナードは、いわゆる「公共文化」(public culture)と信頼との関係も詳細に分析している。そうした彼女の議論については、たとえばLenard, P. T., *Trust, Democracy, and Multicultural Challenges*, University Park: The Pennsylvania State University Press, 2012, Ch. 4を参照。また、本稿ではレナードのさまざまな議論を何度か援用しているが、彼女の議論を概観したものととして、藤原拓広「正義を実現する動機に関する政治哲学的考察——パティ・タマラ・レナードの議論を手がかりに——」『総合文化学論輯』、第一三号、二〇二〇年、二六一―二四頁も参照された。
- (15) See e.g. Miller, D., "Justice and Global Inequality," in Hurrell A. and Woods, N. (eds), *Inequality, Globalization, and World Politics*, Oxford: Oxford University Press, 1999, pp. 198-209; Miller, D., *Citizenship and National Identity*, Cambridge: Polity Press, 2000, pp. 174-178; Miller, *National Responsibility and Global Justice*, Ch. 7 (邦訳: 第七章)。
- なお、ミラーのグローバルな正義論としては、*ibid.*がもっとも有名である。彼のグローバルな正義論を邦語で概観したものととして、たとえば白川俊介「デイヴィッド・ミラーの政治思想を読み解く——国際政治の規範理論として」『政治思想学会会報』第三四号、二〇一二年、八―一〇頁；施光恒「リベラル・ナショナリズムの世界秩序構想——D・ミラーの議論の批判的検討を手がかりとして——」、富沢克編『リベラル・ナショナリズム』の再検討——国際比較の観点から見た新しい秩序像——(ミネルヴァ書房、二〇一二年)、一四二―一四三頁も参照された。
- (16) 施光恒と白川俊介がミラーの動機づけの問題を指摘したものととして、同右、一四四―一四五頁；Shirakawa, S., "A Philosophical Inquiry into an Emotional Motivation for Global Justice: Based on a Critical Reflection on David Miller's Arguments," *Kwansei Gakuin University Social Sciences Review*, Vol. 22, 2018, pp. 42-44を参照(以下)。
- (17) レナードによる彼らの議論の概観および批判的検討として、Lenard, P. T., "Motivating Cosmopolitanism? A Skeptical View," in Brooks, T. (ed.), *Global Justice and International Affairs*, Leiden: Brill, 2012, pp. 100-107を参照(以下)。また、サイモン・ケイニーや

トマス・ポッゲの単著として、Caney, S., *Justice Beyond Borders: A Global Political Theory*, Oxford: Oxford University Press, 2005; Pogge, T., *World Poverty and Human Rights: Cosmopolitan Responsibilities and Reforms*, Second Edition, Cambridge: Polity Press, 2008〔立岩真也監訳『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか——世界的貧困と人権』(生活書院、二〇一〇年)〕も参照されたい。レナードは、ケイニエーらの主張とは端的にいえば、「私たちが他者に対する義務を遂行するのは、たんにそれが私たちの義務だからである」というものだと述べている。Lenard, "Motivating Cosmopolitanism?" p. 100.

たとえばポッゲは、「世界の貧困が裕福な国に住む人々による加害の帰結であることを明らかにしようとしたが、これは、貧困の解決がそうした人々に課された義務だと示すことによって、彼らをもその解決のために動機づけようとする試みでもある。ポッゲは、彼らをグローバルな正義の実現に向けて動機づけるには、積極的義務よりも消極的義務への訴えかけの方がよいと考えていた。『積極的義務への訴えかけは、ピーター・シンガー(Peter Singer)／ヘンリー・シュー(Henry Shue)／ピーター・アンガー(Peter Unger)やその他の人々によって十分におこなわれている。もし裕福な国々の市民に最小限のまっとうさと人道性があるならば、彼らはこうした訴えかけに応じ、世界の貧困を削減するために応分のことをするだろう。[...]しかし、現実にはそうでないため、私たち裕福な人々がグローバルな貧困者に今日課している甚大な困窮の終焉または削減に私が貢献するには、自分の議論を提示することが私に与えられた最善の機会だと考えている』。Pogge, T., "Real World Justice," *The Journal of Ethics*, Vol. 9, No. 1-2, 2005, pp. 35-36〔見玉聡訳「現実的な世界の正義」『思想』No. 993、二〇〇七年、一〇三頁〕。

(法哲学者ではあるが)井上達夫も、ポッゲらと同じような動機づけに関する見解を有している。井上は、次のように述べている。「規範的判断の実効性担保問題の重要性を私は否定しないが、実効性を担保するための動機付けは、規範的判断の是非から独立した変数ではなく、的確な規範的判断をなしているか否かに依存するというのが私の主張である」。井上達夫「生ける世界の法と哲学——ある反時代的精神の履歴書——」(信山社、二〇一〇年)二七二頁。これはすなわち、的確な規範的判断さえできれば、人々は十分に動機づけられるため、それ以外の何らかの動機は必要ないということである。

(18) 神島裕子は、基本的人権の尊重という「動機への訴えは、ベイツとポッゲ、ヌスバウムなどのリベラルなコスモポリタンの議論のみならず、リベラルなナショナリストであるミラーの議論にも見出されるもの」だと述べている。神島裕子「コスモポリタニズムとの論争」、施光恒・黒宮一太編「ナショナリズムの政治学——規範理論への誘い——」(ナカニシヤ出版、二〇〇九年)、一〇一頁。同様の指摘として、Strachle, C., "National and Cosmopolitan Solidarity," *Contemporary Political Theory*, Vol. 9, 2010, pp. 113-114を参照された。

(19) 以下のメタ倫理学に関する記述は、Smith, M., *The Moral Problem*, Malden: Blackwell Publishing, 1994, Ch. 4〔樫則章監訳『道徳の

中心問題」(ナカニシヤ出版、二〇〇六年)、第四章)・佐藤岳詩『メタ倫理学入門 道徳のそもそもを考える』(勁草書房、二〇一七年)、二六三―二七一頁を主として参考に行っている。

(20) 同右、二六五頁。

(21) 同右、二六八―二七〇頁を参照。

(22) ここで述べているように、本稿では、このヒューム主義と反ヒューム主義との論争に深入りすることはしない。しかしながら、ヒューム主義の論拠に少し言及しておくことは、本稿の議論の説得力を高めるために有益かもしれない。たとえば著名な倫理学者たるマイケル・スミス(Michael Smith)は、ヒューム主義の方を支持している。スミスによると、反ヒューム主義は、主として次の三つの点で問題だという。すなわち、その立場は「動機づけ理由をほかの種類の理由から区別していなかったり、欲求を適切にとらえていなかったり、あるいは、理由による説明は目的論的であるという事実の意味を見落としていたりする」のである。Smith, *The Moral Problem*, p. 93 [邦訳: 二二四頁]。彼によれば、「動機づけに関するヒューム主義の理論は堅固な基盤のうえに立っているのである」。Ibid., p. 128 [同右: 二七一頁]。このようなスミスの議論を概観したものととして、杉本俊介「行為の理由についての論争」、蝶名林亮編『メタ倫理学の最前線』(勁草書房、二〇一九年)、一一九―一二二頁も参照のこと。

(23) 白川は、両者とも正義構想が成立するには文化が必要だと考えている点などをあげながら、ミラーらリベラル・ナシヨナリストの思想とヒューム的思想との共通性を指摘している。白川『ナシヨナリズムの力』、第一章を参照。「デイヴィッド・ヒューム(David Hume)やアダム・スミス(Adam Smith)らに代表される『スコットランド啓蒙思想』には、リベラル・ナシヨナリズムの源流ともいえるような知的伝統が見受けられる。ただし、この点を当のリベラル・ナシヨナリズム論の主唱者たちが明確に意識しているとはいえないように思われる」。同右、一五頁。だが、白川も指摘しているように、ミラーはヒュームの研究書として、Miller, D., *Philosophy and Ideology in Hume's Political Thought*, Oxford: Clarendon Press, 1981. を刊行しており、このことを少し自覚してゐるように思われる。白川『ナシヨナリズムの力』、一九五頁、注五を参照。

スコットランド啓蒙思想に関してもう少し述べておけば、その思想家は、感情や情念、共感といった人間の非理性的な本性から出発している点に特徴がある。なお、近年の研究動向では、スコットランド啓蒙は「イングリランド啓蒙と合わせて『ブリテン啓蒙』(The British Enlightenment)を構成する一部と見なし、理性重視で進歩的な大陸ヨーロッパの啓蒙(The Continental European Enlightenment)とは一線を画する保守的で懐疑主義的な運動として理解」されているという。古家弘幸「社会、言語、思想——スコットランド啓蒙の諸相——」『人文科学研究(キリスト教と文化)』、第四六号、二〇一五年、九三頁。リベラル・ナシヨナリズムの論者として見なされることもあるマイケル・ウォルツァーも、政治における情念の問題について論じており、やはり保守的かつ懐疑主

義的な啓蒙思想とリベラル・ナショナリズムの思想とは通底してゐるといふことだ。See Walzer, M., *Politics and Passion: Toward a More Egalitarian Liberalism*, New Haven: Yale University Press, 2004, Ch. 6 [齋藤純一・谷澤正嗣・和田泰一訳「政治と情念——より平等なリベリズムへ」(風行社、二〇〇六年)・第六章]。

(24) Miller, *On Nationality*, p. 58, n. 11 [邦訳：一三八頁、注一]。なお、カント的とヒュームのという対比は、リベラル・ナショナリストに親和的な論者のなかでは、レナードも用いている。たとえば注一七で言及したレナードによるケイニーやポツゲへの批判は、カントの見解に対する(修正された)ヒュームの見解からの批判だ。See Lenard, "Motivating Cosmopolitanism?", p. 100, n. 16.

(25) See Miller, *Principles of Social Justice*, p. 18, n. 11 [邦訳：「心理学的事実」という用語に邦語で言及したものとして、たとえば岸見太一「政治理論は個別事実をどのようにふまえるべきか——D・ミラーの文脈主義的難民受け入れ論の批判的検討を出発点として」『政治思想研究』、第一四号、二〇一四年、二四六頁・奥田恒「心理的事実」にもとづく世界の貧困削減——チャンドラン・クカサスの政治理論を手がかりに——』『人間・環境学』、第二五巻、二〇一六年、一三三—一三四頁も参照のこと]。

(26) See Yack, B., *Nationalism and the Moral Psychology of Community*, Chicago: The University of Chicago Press, 2012, pp. 52-57. 社会的友情という観念に関して、バーナード・ヤックは、共同体の構成員は「お互いの福利に特別の注意を払う気にさせる社会的友情という感覚によって結びついている」と述べている。Ibid., p. 46.

(27) ここで、次のような批判に回答しておきたい。それはすなわち、リベラル・ナショナリズム以外にも、感情を重視する政治哲学上の立場は存在するにもかかわらず、なぜ本稿ではリベラル・ナショナリズムのみを取り上げるのか、という批判である。確かに、共感のような感情に着目した哲学上の立場としては、フェミニズムの立場などさまざまな立場が存在する。正義実現の動機としての感情に注目した議論を概観および検討したものに「Lenard, "Motivating Cosmopolitanism?", pp. 107-113を参照のこと」。また、そうした議論のなかでも、とくにフェミニスト的な議論に着目したものに「Gould, "Motivating Solidarity with Distant Others," pp. 125-137」も、リチャード・ローティ (Richard Rorty) の議論に着目したものに「Shirakawa, "A Philosophical Inquiry into an Emotional Motivation for Global Justice," pp. 44-46」も参照されたこと。

このような立場があるなかでも、リベラル・ナショナリズムの立場を取り上げる理由は、私が、リベラル・ナショナリスト的な社会正義論に賛同しているからである。さらにいえば、私がリベラル・ナショナリズム論と矛盾しないかたちでグローバルな正義を実現するための動機について考えたいからである。もちろん、リベラル・ナショナリストの議論に依拠しながらも、グローバルな正義実現の動機についてはローティの議論を援用している白川の「グローバルな正義の情緒的動機に対する哲学的探究」(「A Philosophical Inquiry into an Emotional Motivation for Global Justice」) のようなアプローチもあり得るが、本稿はそうした本格的な

動機づけの理論の構築のまえに、あらためてリベラル・ナショナリズム論を参考にしながらそもその動機づけの重要性などを序論的に考察するための論文である。リベラル・ナショナリズムと一貫したかたちでグローバルな正義実現の動機について考えるために、ひとまずリベラル・ナショナリズム論を足がかりとしながら動機づけの意義を論じたいのは自然なことのように思われる。

(28) 伊藤恭彦は、倫理学者のトマス・ネーゲル (Thomas Nagel) のリベラルな制度設計に関する、制度理念は「理性的な諸個人がそれにしたがって生活したいと動機づけられなければ、それがどれほど魅力的であっても、ユートピアである」という指摘をふまえて、「財の移転が正義の要求であったとしても、移転がやはりどこかで私たちの自己利益に関連づけられていた方が制度への支持を得るうえでも安定性を確保するうえで望ましい」と述べてはいる。Nagel, T., *Equality and Partiality*. New York: Oxford University Press, 1991, p. 21. 伊藤恭彦『貧困の放置は罪なのか グローバルな正義とコスモポリタニズム』(人文書院、二〇一〇年)、一七九頁。

しかしながら、伊藤は、そうした動機づけの問題はあくまでも副次的な問題だと留意している。同右、一七八―一八一頁を参照。

(29) ヨラム・ハズニーは『ナショナリズムの美德』(The Virtue of Nationalism) において、ナショナリズムをめぐってリベラル・ナショナリストと同じような議論を展開しているが、少し違うところもある。この点については、藤原拓広「書評 ヨラム・ハズニー著、庭田よう子訳、中野剛志・施光恒解説『ナショナリズムの美德』」『政治研究』、第六九号、二〇二二年、八四―八五頁を参照されたい。

(30) See Hazony, Y., *The Virtue of Nationalism*. New York: Basic Books, 2018, Ch. 8 (庭田よう子訳／中野剛志・施光恒解説『ナショナリズムの美德』(東洋経済新報社、二〇二一年)、第八章)。

(31) *Ibid.*, p. 39 (同右：七九頁)。

(32) *Ibid.*

(33) *Ibid.*, p. 60 (同右：八〇頁)。

(34) 中野剛志「不寛容な「リベラリズム」、多様性を尊重する「国民国家」、ハズニー、ヨラム(庭田よう子訳／中野剛志・施光恒解説)『ナショナリズムの美德』(東洋経済新報社、二〇二一年)、七頁。

(35) 井上は、動機づけの問題を重視する主張は、以下のように二様に解釈できると論じている。「一つの解釈は、動機付け力が規範的判断の意味に内在しているとして、動機付け力をもたない規範的判断は規範の意味を喪失し、動機付けられない主体に対して正当性を欠くとするメタ倫理学上の動機内在主義 (motivational internalism) である。もう一つの解釈は、規範的判断の妥当性 (validity, Geltung) ではなく、その実効性 (efficacy, Wirksamkeit) が動機付け力に依存するとし、我々は妥当な規範的判断が何かを議論するだけでなく、その実効性を担保するために動機付け問題にも留意するべきだという主張である」。井上『生ける世界の法と哲

- 学」二七二頁。ここで私がハズニーの議論を援用しながら展開した主張は、たんなる実効性の問題として動機づけの問題を扱っているわけではないため、後者とは異なる。また、「動機付け力をもたない規範的判断は規範的意味を喪失」とするほどの強い主張でもないため、前者よりも少し異なるように思われる。
- (36) Miller, *On Nationality*, pp. 57-58 [邦訳：一〇四頁]。
- (37) Lenard, "Motivating Cosmopolitanism?" p. 93.
- (38) See Lenard, P. T., "Creating Cosmopolitans," *Critical Review of International Social and Political Philosophy*, Vol. 15, No. 5, 2012, p. 629, n. 20.
- (39) このように述べたからといって、私は決して非民主主義国や少数者の人々が重要ではないと主張しているわけではない。当然ながら、政治哲学において、そうした事柄は軽視されるべきではない。私がここでいいたかったのは、動機づけの問題に取り組むには、実際の政治において意思決定の中心たる民主主義国の多数者はとりわけ重要な主体となるのであり、彼らを動機づけられなければ、グローバルな正義の実現は困難だということだけである。
- (40) See Walzer, M., "Philosophy and Democracy," in his *Thinking Politically: Essays in Political Theory*, Miller, D. (ed.), New Haven: Yale University Press, 2007 [「哲学とデモクラシー」萩原能久・齋藤純一監訳「政治的に考える——マイケル・ウォルツァー論集」風行社、二〇一二年)。
- (41) ミラーが「政治的に考える」(*Thinking Politically*)の「序論」(Introduction)でウォルツァーの議論を的確かつ端的にまとめているので、以下の記述はそれを参考にしよう。ミラーのまとめとくは、Miller, D., "Introduction," in Walzer, M., *Thinking Politically: Essays in Political Theory*, Miller, D. (ed.), New Haven: Yale University Press, 2007, p. viii [「序論」萩原能久・齋藤純一監訳「政治的に考える——マイケル・ウォルツァー論集」(風行社、二〇一二年)「三頁」を参照のこと。なお、ミラーが彼自身の政治哲学の方法論を展開する際には、彼は「宇宙船(スターシップ・エンタープライズ号)」的な政治哲学ではなく、「地球人」のための政治哲学が重要だと比喩をまじえながら論じている。See Miller, D., "Political Philosophy for Earthlings," in Leopold, D. and Stears, M. (eds.), *Political Theory: Methods and Approaches*, Oxford: Oxford University Press, 2008 [「地球人のための政治哲学」山岡龍一・松元雅和監訳「政治理論入門——方法とアプローチ」(慶應義塾大学出版会、二〇一一年)。
- (42) Miller, "Introduction," p. viii [邦訳：三頁]。
- (43) *Ibid.* のことは、例として東アジアにおける米国人の人権活動を想像すれば分かりやすいだろう。東アジアの市民は、その地域の伝統や思考様式を理解しようとせず、普遍的とされている人権の原理を押しつけてくる米国人の人権活動家の話に耳を傾けよう

とは「なごびあふん」。See Bell, D. A., *East Meets West: Human Rights and Democracy in East Asia*, Princeton: Princeton University Press, 2000, Ch. 1 (施光恒・蓮見二郎訳『アジア的価値』とリベラル・デモクラシー——東洋と西洋の対話 (風行社, 二〇〇六年) 第一章)。

(44) See Deneen, P. J., *Why Liberalism Failed*, New Haven and London: Yale University Press, 2018 (角敦子訳『リベラリズムはなぜ失敗したのか』(原書房, 二〇一九年)。

(45) *Ibid.*, p. 3 (同右: 一七頁)。

(46) ここからも分かるように、本稿は、合理的選択をおこなう個人という人間観に否定的であり、そのような人間観を前提とした合理化にも批判的である。だからといって、私は、本稿が完全に非理性的な議論を展開しているなどとは考えていない。なぜなら、ミラーが述べているように、理性とは「人間の心理的要求と心理的境界とを適切に考慮すること」とも理解できるからである。Miller, D., "Nationalism," in Dryzek, J. S., Honig, B. and Phillips, A. (eds.), *The Oxford Handbook of Political Theory*, Oxford: Oxford University Press, 2008, p. 540.

(47) See Goodhart, D., *The Road to Somewhere: The Populist Revolt and the Future of Politics*, London: C. Hurst & Co. Ltd., 2017; Lind, M., *The New Class War: Saving Democracy from the Metropolitan Elite*, London: Atlantic Books, 2020 [中野剛志解説／施光恒監訳／寺下滝郎訳『新しい階級闘争 大都市エリートから民主主義を守る』(東洋経済新報社, 二〇二二年)]。

(48) デニーンらの議論を参考にしながら、社会や国家に関して考える際に前提とすべき人間像について語っている対談として、施光恒・岩田温「対談 ナショナリズムの美德」『WILL』, 第二〇三号, 二〇二一年, 二九六―三〇七頁も参照のこと。

(49) こうした問題意識を前提に正義を実現するための動機について論じた文献として、たとえば藤原「正義を実現する動機に関する一考察」を参照のこと。また、レナードは、以下のように述べ、ナショナリストの主張はコスモポリタンのそれよりも説得力があると指摘している。「コスモポリタンが、道徳的動機に関しての真に説得力のある説明、すなわち一般的な人々のコミットメントをうながし得る説明を提供できるまでのあいだ、ナショナリストの主張は、動機づけの観点から依然として説得力あるものである」。Lenard, "Motivating Cosmopolitanism?" p. 94. なお、動機づけの理論の主たる対象を特定するために、(1)では便宜上、英雄的な人々と一般的な人々という対比を用いているが、この対比は、それらの人々のあいだの優劣の存在を示唆するものではない。この対比で示したかったのは、動機づけについて考える際には、現実から遊離したごく少数の英雄的な人々を対象とするよりも、大多数の一般的な人々を想定した方が、はるかに意味があるということだけである。

(50) Miller, *On Nationality*, p. 58 (邦訳: 一〇四―一〇五頁)。

- (51) 施・岩田「対談 ナショナリズムの美德」三〇〇頁。実際問題、「私たちはつねに、白紙の状態からではなく、みずからの所属する共同体や制度——家族、学校、教会など——によって教えこまれてきた諸価値から出発する」ものである。Miller, *On Nationality*, p. 44 [邦訳：七六頁]。
- (52) See Lenard, "Motivating Cosmopolitanism?" pp. 111-112.
- (53) 「」の厚い道徳や薄い道徳と云った表現については、Walzer, M., *Thick and Thin: Moral Argument at Home and Abroad*, Notre Dame: University of Notre Dome Press, 1994 [芦川晋・大川正彦訳『道徳の厚みと広がり われわれは』]まで他者の声を聴き取る「ことができるか」(風行社、二〇〇四年)を参照のこと。
- (54) ここでいいたいのは、文化横断的な動機づけの理論の構築も可能だということだけであり、決して文化ごとに異なるグローバルな正義実現の動機づけの方法の存在を否定しているわけではない。
- (55) 藤原「グローバルな正義論における秩序構想と動機の問題をめぐって」一八頁。